

胃癌のスクリーニング検査 としての胃酵素

Gastric enzymes as a screening test for gastric cancer: *Finch PJ, Ryan FP, Rogers K, et al* (Gut 28: 319-322, 1987)

胃癌は英国で4番目に多い悪性腫瘍で、5年生存率は4.7%と極めて低い。しかし早期胃癌の5年生存率は70.4%と高い。したがって早期胃癌の発見、前癌病変と言われている severe dysplasia や type 2B intestinal metaplasia の診断は意味のあることである。著者らは内視鏡的に採取した胃液中の lactic dehydrogenase と β -glucuronidase を測定し胃癌のスクリーニング検査としての有用性を prospective に検討した。ルーチンの上部内視鏡検査を施行した40歳以上の445人を対象とした。内視鏡を胃内に挿入し、まず

貯溜していた胃液を吸引し捨てた。十二指腸に入る前に、十二指腸液の胃内への逆流を最小限にするために、あらかじめ体温まで温めておいた xylose 4 g/l を含む sorensen buffer (67 mmol phosphate pH 7.5) 100 ml を幽門部に散布し、粘膜に付着していた粘液を洗浄した。噴門部に溜まった洗浄液を内視鏡を反転し吸引採取した。通常の内視鏡検査にわずかの時間が加わるだけである。lactic dehydrogenase は IU/l の、 β -glucuronidase は IU/ml の3乗根を index とした。両者とも index が5.8以上を陽性とした。胃癌については sensitivity 91.3%、specificity 81.3%であった。早期胃癌4例と linitis plastica 1例の全例で陽性を呈した。正常胃、食道、十二指腸疾患では false positive はまれであった。false positive の95.9%は組織学的に atrophic gastritis

with or without intestinal metaplasia であった。また、5例の severe dysplasia のうち4例が陽性であった。以上より胃液中の lactic dehydrogenase と β -glucuronidase の測定は胃癌(特に早期胃癌)のスクリーニング検査としてのみならず、胃癌の high risk グループのスクリーニングにも有用であり、また、false positive グループは今後の内視鏡的 follow-up が必要であると述べている。

【訳者コメント】愛知県がんセンターでも疫学部と消化器内科が協力して、胃癌の前癌病変としての胃炎の研究を prospective に研究しているが、著者らの方法を加え検討することは更に興味深いものとなるだろう。

(愛知県がんセンター消化器内科

亀谷 章 抄)